

これからのコスモス、これからの結社

出席者 高野公彦・小島ゆかり

大松達知・水上芙季

小島 創刊七十周年記念の座談会を始めたいと思います。テーマは、「これからのコスモス、これからの結社」ということで、なんとなく未来型のテーマなんですが、未来を考えることはつまり、過去を振り返ることもあります。今日お集まりいただいた皆さんは、高野さんと小島が十五歳違い、小島と大松さんがやはり十五歳違い、大松さんと水上芙季さんが十歳違い。というわけで、かなり均等に年の差がある四人です。たとえば、高野さんにとってのコスモスと、大松さんにとってのコスモスは、どんなふうにちがうのか。また、一番お若い水上芙季さんは、コスモスにどんな希望や要望をもっているのか。それぞれの年代を通して、コスモス全体を見渡しながらか、今後について考えていくきっかけになればと思います。

コスモス入会のところ

小島 高野公彦さんは、常にコスモスの平均年齢ということ

ですが。すると現在の平均年齢はかなり高齢ですね(笑)。失礼しました。最初はざくばらんに入会なさったきっかけや、その頃のコスモスのことについてお話しください。

高野 僕が入ったのは、学生だった昭和三十九年の秋です。僕は昭和三十八年から三十九年にかけて朝日歌壇に投稿していたんですが、三十九年の夏のある日、下宿に宮先生から電報がきて「電話ください」と電話番号が書いてあった。電話をしたら「時間があるときに遊びにきなさい」って。コスモスにはまだ入ってないですけど、夏休みだったから次の日に行ったら、コスモスに入れとは言われなくて、「コスモスでアルバイト探してるから、君やってくれないか」と。当時、大田区の守屋ビルの一室を守屋一郎さんのご厚意でコスモスの編集分室として使わせてもらってたんですね。毎月、編集会と校正作業と、ひと月に数日しか使わなくて、あとは空室なんです。アルバイトっていうのは、そこに住み込みの留守番をしてほしい、ということでした。コスモスに入る前に編集部に入る、みたいな感じ。宮先生のご厚意で朝日歌壇

の選者として尊敬していましたから、留守番のアルバイトを引き受けると同時にコスモスに入ったんですよ。ちょうど東京オリンピックがまもなく開催される頃でした。通信コスモスに「新人紹介」っていう欄が今でもあるでしょ、その頃ひと月に二十数人くらい新入会員の名が並んでいて、偶然ですが僕と河野裕子さんが同じ月に入ったんですよ。

小島 それは輝かしい年ですね(笑)。

大松 守屋ビルには何年くらいお住まいだったんですか？

高野 昭和四十二年に大学を卒業するまでずっとそこにいたから、二年半くらいかな。就職してすぐ市川に引っ越しました。就職も宮先生が河出書房に口をきいてくださった。河出の営業部長がコスモス会員の内島隅一さんだったんです。いろいろな面ですごく宮先生にお世話になりましたね。

大松 ちなみに、結婚相手も宮先生に紹介していただいたって聞いたことあるんですけど。

高野 あっ、そうそう。

大松 就職も結婚も！(笑)

高野 紹介というか、在学中に「君、教育大にいるそうだけど、同じ教育大の西洋史学科に幸田明子という人がいる。会ってみたらどうだ」って言われました。彼女もそのころ朝日歌壇に投稿していたんですね。

小島 高野さんの人生は宮先生が決めてくださったようなものですね。

高野 はい、その通りです(笑)。編集会には宮先生のほかに葛原繁さんや田谷鋭さんや島田修二さんなど、作者として

ハイレベルな人たちが集まっていたから、そういう人たちの会話を聞いたり一緒に仕事をしていると、すごく勉強になるんですね。それから東京歌会にも行くようになって。そこでたくさんのコスモス会員と会って交流できるっていうのも楽しみでしたね。勉強にもなりました。

小島 そのころ宮先生はお幾つぐらいだったんですか？

高野 まだ五十代で、お元気でしたね。宮先生は東京歌会にも必ず出席されました。歌会では的外れの批評をする人もいましたが、人の言うことを全部信じる必要はないということを学びました。最後は自分で判断することが大事ですね。

小島 はい、ありがとうございます。次は年齢順にいくと小島、私になるんですが。私は昭和五十三年の秋に入会をして、ただ翌年には大学を卒業して郷里に帰りましたので、東京歌会に一回だけ行って、あとは故郷の愛知県の支部歌会に参加しました。私も大学で短歌を作り始めたときに宮先生の歌集を読んでいて、歌集『晩夏』が好きというようなことを話したときに、早稲田の短歌同好会の先輩が「じゃあコスモスの若手のグループを紹介してあげよう」ってことで「桐の会」に入り、それをきっかけに。

もう一つは、母の静子が私の高校生の頃からコスモスに入っていて、家に宮先生の本がたくさんあったので、自然に親しみ深い気持ちになっていたんですね。いまよりは若い層が多かったんですね。ですからやっぱり人とのつき合いが楽しかったなと思います。

では次は、大松さんです。



小島ゆかり氏

大松 通っていた

中学高校に奥村晃作さんが社会科の先生としておいでだったんです。高校二年のとき、奥村さんの『鴉色の足』を読んで、おもしろい！これなら作れそう！と思って始めました

た。そのあと、浪人したときの予備校に田原千佳子さんという詩人で歌人で、英語の翻訳家がおいででした。大学へ入ってすぐ、その先生がいる「Q」という五、六人の雑誌に誘われたんです。それで奥村さんに相談したら、慌てて「じゃあコスモスに入りなさい」となって。奥村さんは大学受かったらすぐに誘うって言うたのに、なかなか連絡がこなくて（笑）、これはダメなのかなと思って、「Q」っていう雑誌に入りそうになりました。

小島 あぶない、よかった。

大松 入会したのが一九九〇年夏。宮柾二先生は一九八六年に亡くなっていましたけど、ご存命中の熱気はまだ残っていたようでした。茗荷谷の東京歌会では、野村清さん、鈴木英夫さん、今村寛さん。それに宮英子さんがとてもよくしてくれたんです。ふだん、祖父母のことを人間的には好きでも、

合う趣味とか話題はあまりないですよ。でもコスモスではその世代の人たちと、短歌を通じて有意義な話ができた。野村さんは九十歳を超えておられた。もちろん世代差があっても理解してもらえなかったこともありましたが、でも、いま名前をあげた人たちは不思議と歌を褒めてくれたんです。何十歳もちがうのにすごいことだなあって。きちんと表現すれば通じ合えるんだな、と思って、今に至っています。

小島 では最後に、美季さんお願いします。

水上 私が入会したのは二〇〇五年の六月で、九月号から作品が載ったんですが、入会のきっかけは、まず青山女子短期大学に通っていて、そこで高野先生とゆかりさんが教えてくださった。四つ上の姉がまず高野先生の授業をとっていて楽しそうだなって思って。なので、結社に入ろうかなではなくて、最初からコスモスが憧れの場所だったんです。私が入る四年前に母もコスモスに入っていて、大学の一年上に片岡絢さんもいたので。

ただ、入りたいなとは思っても、毎月十首っていうのが自分のできるかどうか不安で、一年ぐらい一人で毎月十首作ってみようって思ったところに、大松さんからメッセージカードが届いたんです。覚えてらっしゃらないかもしれないんですけど、「締切りがあれば歌はできます。まずは十首作ってみてください」って書いてあったんです。かわいい大松さんの顔のイラストが描いてあって（笑）。それでそのまま入りました。

小島 大松さん、ナイスです！

水上 入ってすぐの全国大会のときに、あいうえお順の席でお隣りに宮英子さんがいらして、声をかけてくださった。ほかの皆さんも温かく迎えてくださった。ただ若い人はあまりいないなあっていう印象でしたけど。

高野 僕らの頃は、僕と同じ教育大の学生で柿崎村彦とか、慶応にいた坂野信彦とかね、学生でコスモスに入っている人がだいぶいましたけど。いまは学生で結社に入る人は少なくなってるね。

水上 私は早稲田短歌会のOBの方が多くいるガルマン歌会にも参加していて、コスモスの歌とのギャップにびっくりした記憶がありますけど、どっちからも吸収できてよかったですと思います。

大松 僕は「短歌人若手の会」の歌会にも出ていましたね。

辰巳泰子さんとか宇田川寛之さんがいて。小池光さんや穂村



高野公彦氏

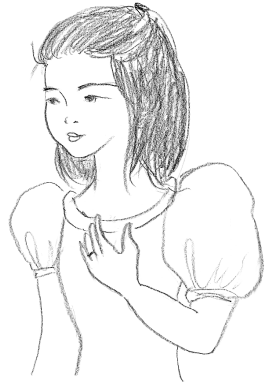
弘さんが来たこともあって。コスモスの人付き合いだけだったら歌の幅は狭かったかもしれない。同世代の繋がりや理解は、歌を続ける上で心強かったです。

入会後のあれこれ

高野 コスモスには同世代が集まって、数人もしくは数十人の結社内同人誌がある。これが大きな特徴で、最初はGケイオスという奥村さんがやっていたグループがありました。奥村さんは若さのあまりちよつと勝手なことをしたようで、宮先生に叱られてね、おとなしくなっていました(笑)。僕はコスモスに入ってまもなく奥村さんと会って、コスモスの秩序を乱さないようにしてGケイオスを復活させましょうと相談して、「Gケイオス通信」というガリ版刷りの冊子を出したんです。僕はそこに「白秋の『雲母集』におけるシユールレアリスムのなもの」というような評論を書いたりしました。そのGケイオスが終わったあと、「群青」という同人誌を、

武田弘之さんと杜沢光一郎さんと奥村さんと四人で始めたんですね。年に一回しか出さない雑誌を十年ぐらいやって、それから「棧橋」です。同人誌は年代の近い人が自由に活動できるし、十首以上の作品をまとめて作って選歌なしで発表できるのがいいですよ。いまも、「灯船」と「コクーン」などがあって、同人誌の活動が継続してるのが頼もしい。

小島 歴史がありますね。皆さんそれぞれ歌歴を重ねて、結社に在籍するのも長くなってきたと思うんですけども、よかったことはもういろいろ出ましたけれど、例えば選を受けるとの違和感とか、ほかにも息苦しいなっていう思いなどあったら、この際正直に白状して(笑)、今後を考えるのに



水上美季氏

ぜひともしもご意見を。
美季さん、どうで
すか？

水上 まず大変な
のは締切り（笑）。

小島 それはコス
モスに関係ないで
すね！

水上 あんまり息
苦しさは感じない
ですけど、歌集出

したときの批評会が、結社の人と一緒にの会しかないので残念
だなんて思ったことはありません。

小島 そう、結社外の人の意見を聞く機会はないですね。

高野 ああ、僕も他結社の出版記念会に招待されてスピーチ
したことがありますけど、個人の出版記念会をするのは大変だ
と聞きました。費用は会費でまかないませんが、もし足りない
場合は著者本人が負担するそうで。

小島 そんなに華やかじゃない程度で、勉強会みたいな形で
あれば…。

大松 僕の第一歌集の批評会では、持ち出しはほぼなかった
ですね。会費制だったし、お祝いもいただいたし、それを
会場費に当ててって感じだったんで。

小島 結社が主催している場合と、仲間にやってもらう場合
とで、またちがつてきますよね。

大松 お祝いメインの豪華な会は、減っているんじゃないで
すか。中身が大事だし、勉強熱心だし。

高野 なるほど、やり方によってずいぶん違うよね。コスモ
スは確かに、合同出版記念会をやるから、単独で出版記念会
をするのは何となく遠慮する、という空気がありました。で
も時代が変わりましたね。昔、歌集を出すのは主宰者の許可
が必要でしたが、今は自由に出せます。

小島 大松さんは口語の作者ですけど、選を受けたときに違
和感みたいなのはあつたんですか？

大松 最初のうちは、わかってもらえなくて悔しい思いをし
たこともありますね。いまの二十代の歌を見ると、俺、昔こ
ういう方向の歌を作ってたのにつて、思うことあります。コ
スモス以外ならもつと理解されてたかなあつて。選者と年齢
が違い過ぎるデメリットは確かにあります。でも一方で、短
歌としての核の部分に反応してもらえることもある。世代と
は別に、骨太に作りなさいというメッセージを出すのは大切
なことだと思えますね。

高野 僕らの頃の選者は、僕らの兄の世代、あるいは父の世
代でしたけど、あなたがたの頃はもう祖父母の世代が多くな
っていた（笑）。でも僕は選に対してなんの疑問も持たなかつ
たですね。選から落ちた歌には何の未練も持たなかつた。
ずっとあとになって知ったんですが、落ちた歌をまた直して
出すという人がいるのを聞いて驚きましたね。

大松 僕もそれはやったことないですけどね。

高野 落ちた歌を直してまた出すのは、その人の進歩のため

にはマイナスだと思えます。きっぱり諦めて新たな歌を作るほうがいい。

大松 かつて違和感があったのは「コスモス短歌道場」という企画。「道場」って、師匠がいて下っ端がいるという前提の、上から目線。特別欄なのに選されて、七首中五首だったかな、載ったんです。変な感じしました。短歌の上ではみんな並列じゃないですか、現実的には選はあっても、みんな平等という気持ちでやってるのに、「道場」って。

高野 「道場」という名前は、違和感を覚えるよね。

小島 私は年代的に大松さんのような大きな違和感はなかったですけど、たまにかすかな違和感が。歌を直してとってくださっていて、直されること自体はいいんですけど、その直しが、いかにも年配の男性の言い方になってしまっていて、その頃まだ若い女性だった私は、ええー、これはないなああってちよつと思いましたが、逆

のこともあった。そのときはよくわかんなかったことが、例えば歌集を作るときになって見直してみても、はあーなるほどって。自分がちよつと成長したんだと思

大松達知氏



ますけど、後からわかって感謝したっていうこともたくさんありました。

高野 僕も編集人になってから、選者の皆さんに「なるべく詠草を直さないでください、嫌がる人多いんで」と言っています。もし歌を直されてどうしても納得できない場合は、自分の歌集出すときに自分で直せばいいんです。

小島 そう、私も何首かこっそりもとに戻して歌集に入れたことがあります。ところが自分が選者になってみると、「ここを一言直せばすごく良い歌になるのに」っていうのもあって、自分も同じことをしてしまっているのかもしれないと、反省することがあります。

大松 選者になってから、けっこう直してるけど一回も文句言われたことはないの。それは受け入れてくれてるのか、我慢しているのか(笑)。

高野 ほんのちよつと直して、すごく良い歌にするのが最高の直し方なんじゃないかな。

これからのコスモス、これからの結社

小島 そろそろ本日のテーマを意識していきたいと思うんですが、最近では新人賞の受賞者や応募してる方々をみても、結社に入っていない無所属の人が圧倒的に多くなっていて、そのことに対して、コスモスも含めた今後の短歌界全体を考えたときに、どんなふうに使われているのか、お聞かせ願えますか。大松さん、いかがですか。

大松 とにかくもう、時代の変化の大きさに驚きます。たとえばテレビ。視聴率が下がっていて、見ているのは高齢者だけなんて言われるほどです。YouTubeなどで好みの人の出る短い動画を見る傾向にありますよね。自分の好きなものを選び、そこから自分の世界を膨らませてゆく。そういう方向。とすると、いきなり結社に入るよりも、友だち同士のグループをまず作って、その中に歌柄や考えが合う人を誘ったり別のグループを作ったりする。そんな世の中の流れなんですかね。短歌結社はテレビみたいなのに、いろいろな番組を受け入れられるおもしろさがあった。つまり、付き合いたい人や読みたい作品ばかりではないものと付き合うおもしろさ。それが一周して良い歌につながってゆく可能性がある。でもそれを受け入れるほど寛容な世の中じゃないのかなあ。

経済観念も、世代の差がとても大きいようですよ。だから、一か月に二千円分の雑誌を買うとか、まして歌集を出すとか、かなりの贅沢。つねに費用対効果、つまりコストが意識される。ゆっくりと話ができるわけじゃないし、好きな物も食べられないパーティーに何千円も払うのは耐えられない。もちろん、オタク的にここぞと思うところにはお金をかけるようですよ。ですから、短歌結社が、その「ここぞ」になれるかどうかが問われるわけです。厳しいですけど。

ただ、結社という存在は、選んで入るといふより、なんか運命的な感じで入るのかもしれない。この四人もそうですね。自分で選んだものは自分の責任でやめられるけど、運命的に入ったグループはやめる理由がない。運命だから。この

国、この時代に生まれましたって決められたらそこで生きるしかないというのに近い。短歌グループには、運とか縁とかが大切かもしれません。それをいまの二十代三十代の人が受け入れるかどうか。受け入れたら強いと思うのは、自分も上の世代になつてしまったからですかねえ。

小島 美季さんはどうですか？

水上 私も大松さんがおっしゃっていたことと似ているんですけど、作品を発表する場があったり、歌会があったりっていう結社の良さがあつたけど、なくてももうツイッターとかインスタとかネット上でタダで自分の作品を読んでもらえる場ができてしまっているので、そちらの方に流れてしまう人たちが多いのかなと思います。自分と合う人たちだけでやりたり…。違うところは、自分が選んで会う人ではない人と出会えるっていうのが結社の良いところなんですけど、そこを良いと思うかどうかはまた別なんです。結社は会社組織みたいなものなので、維持していくのが大変。熱意だけではなく、運営していくってことを考えていかなきゃいけないから…。ただ結社に入らないと、歴史を繋いでいくことがないので、大きな歴史から見ると何も無しになっちゃう、バラバラになっちゃうっていう気がします。

小島 なるほど。ネット系、詳しくはないですが、それでも想像以上に場が開かれて、多くの作者が熱心に学んでいることがさいきんわかってきました。高野さんどうでしょう、若いお二人の意見を聞いて。

高野 結社に入らないで短歌を作っている人は、ずっと五年

も十年も続くのか、それとも途中でやめてしまいか、どうな
んでしよう？ 結社の中になると、友達がいたり締切りがあ
ったりするからズルズルとでも続きますね。無所属だと持続
しにくいんじゃないかなあ。結社に入っていると、やめるの
も面倒だから続ける（笑）。

大松 インターネットのおかげで、三十年前ぐらいより若手
歌人たちの繋がりが密になってきているようです。昔は結社に入
らないと歌人の友達が少なかったかもしれない。でも今はツ
イッターやインスタグラムなどで繋がれる。メディアのあり
方が変わってしまったんです。だから、無所属でも孤立して
いる印象はない。コスモスに歌を出しても誰も何も言ってい
ないけれど、ツイッターに戯れ歌を載せると誰かがイイ
ネ！ってボタンを押してくれるんですよ。それはやっぱり
嬉しいことです。それよりも、本も雑誌も売れなくなつてき
た時代の中で、会員の機関誌ですけど、コスモスとしてど
ういう魅力を打ち出すかっていうのが、問われているんだと
思います。良い答えはないんですけど。

高野 イイネというのは、本当にその歌を正しく解釈して、
ちゃんとした鑑識力があってイイネと言ってるの？

大松 イイネ！っていうのは良いって意味じゃなくて、「読
んだ」っていう記号ですね。それはそれで嬉しいものですよ。
高野 結社にいますと、選を受けたり、歌会で人の批評を聞き
たりすることで、歌の良し悪しを判断する訓練をしているん
ですね。でも、自由にやっている人たちは、厳しくまじめに
お互いの歌を批評しているんでしょうか？ 歌はたくさん作

り出されるけど、お互いイイネと言っているだけ、という恐
れがある。インターネットが広がった時代が短歌史において
暗黒の時代になっているかもしれない。長い目で見れば、結
社に入っている吉川宏志さんの歌集や大松君の歌集が残って
ゆくんじゃないですか。

大松 それはインターネットの問題じゃなくて、歌集を出す
かどうかの問題ですよ。

高野 インターネットの人で、歌集を出さない人は残らない
でしょ。

大松 レコードの普及初期には、レコードで聴くのは音楽じ
やないと言われたそうです。メディア関係は大丈夫ですよ。
コスモスでも諸事情で歌集のない人はいますし。残る残らな
いの価値観も変わっているのかもしれませんが。例えばインス
タグラムでは投稿が翌日には残らない形式を選ぶ人も多いし。
良し悪しは別にして、とうか良し悪しは今のわれわれの観
点ですし。いまの若手はお金ないと言いつつも歌集を買って、
Zoomで読書会をしたりしてる。コスモスの会員で毎月一冊
歌集読める人は少ないと思う。

小島 私たちはコスモスが好きで、コスモスの活動を大事に
やっていきたいという気持ちは強いと思うんですけど、もし
たら今のようないろんな問題点、時代との齟齬とかを考え
ながら、じゃあどうしたらよいか。変化した方がいいところ
と、変化しない方がいいところっていうのを考えて終わりに
したいと思います。

高野 名案はないなあ。

大松 結社の役割の一つは、先輩歌人の歌を残すことですよね。それは継続的にやっていくべきじゃないか。

小島 先ほど高野さんがおっしゃったことにも繋がるんですけど、同人誌みたいな結社内のグループにはまだ方向性があると思います。私は「コクーン」に、本当は若い人の会だから私は入れないんですけど、長老会員ということで（笑）。老年の私が彼らの歌を批評するにはすごく注意深く読まないといけない。読んで若い人の意見を聞くことによって自分の古びた感受性が刺激される。でも、若いことはまだ不安定なんですよ、表現もなにも。新しい時代の新しい表現を開拓していくのは素晴らしいことだけど、ともすれば自分勝手にやりすぎてしまつて表現の基本的なところが疎かになる。古いつて言われても、私はやっぱり宮先生から高野さんへ受け継がれて、高野さんが「棧橋」で私たちに教えてくれたものをきちつと後輩に伝えたい。小島があんなこと言つてたなつて取捨選択はもちろん自由だけど、それでもリレーしていくつてことが大事だと思つています。年齢に拘わらず同じ世代だけが集まると見えなくなるものがありますよね。

大松 会えない時期があつても、前からの知り合いの作品は、言葉だけではなく人生を読むおもしろさもありますね。それが何かのグループに継続して入つてないと切れやすくなることはあるでしょう。そこは結社の強みなかなつていうふうには思います。

小島 コスモスがなければ、高野さんと水上美季ちゃんが仲良くなるなんてことはあり得ないですからね（笑）。

高野 普通なら絶対繋がりが無いような人と、東京歌会なんかで会つて言葉を交わすのは本当に楽しいことです。この三年ばかり、ほとんどコスモスの人と会えないから寂しいですね。やっぱり人間的な繋がりが保てるっていうのがすごく良い面で、若い人たちにとつても魅力のあるところじゃないですか。だから逆にいうと、対面で人と接触することがないようなりモートの歌会は魅力が乏しい。生身の人間に会うことが楽しいんだから。

小島 そのお気持ちがよくわかりますし、私もリモートは苦手ですけど、でも、たとえば私が子育て中だった三十年前は、歌会へ行くなんてはじめからあきらめてました。今は子連れでも参加できる雰囲気にはなりましたが、それでもママたちは本当に気をつかつて落ち着けない。リモートなら自宅で参加でき、自由に退出もできますので、そういう点では貴重な進化です。さらに進化すれば、どこの地域からでもリモートで東京歌会に参加できたり、逆に以前の出前講師のように選者がリモートで地方の歌会に参加したり、そんなことも実現するかもしれないと思うと、やはり期待はあります。

さて、ゴールが近づいてきましたけど、何か付け加えたいことはありますか？

大松 核家族化して長いですよ。おじいちゃんおばあちゃんと会わない人も、結社に入ると、疑似おじいちゃんおばあちゃんに会える、逆に疑似孫にも会える（笑）。

高野 年が離れていて、自分の歌が理解してもらえないとか、見当はずれな批評をされるとか、嫌な気持ちになることつて

あるじゃない。でも世の中はそういうもので、自分を理解してくれない人が一杯いる。その人たちと接触することで、人間的に鍛えられるわけですよ。理解してくれる人ばかりの中で歌を作っていると〈ひ弱な歌〉になると思う。

大松 コスモス創刊以来の七十年は、日本史上の最も豊かで安定した七十年とも言えます。これから人口が減るし、日本はある意味で下り坂なわけです。だからこそ下の世代の気持ちをわかってあげたいですね。選者としてはもつと深く、寄り添って歌を読みたいのですけれども、なかなか。

高野 それは選者によっても違うからね。

小島 選者かどうかに関わらず、自分と感性が合う人と出会うと、とても深く理解してもらえますよね。

水上 結社は厳しいというイメージかもしれませんがね。

大松 そもそも結社という呼び名が怖い。

小島 アヤシイ秘密結社みたいな(笑)。

高野 「短歌雑誌」とかにすれば。

小島 それぞれ、言い方をちよつと変えればいい。

高野 ふところに刃物を隠し持っていて、何かあったら刃物を取り出す、というようなイメージがあって、結社は怖いのかな(笑)。

小島 そこまで怖くは……。でも「短歌雑誌」とみんなで言うようにしましょう。

高野 若い人たちは、コスモスだけじゃなくて結社に対する抵抗感があるのかねえ？ 君たちがそれを解きほぐして、結社の良さに気づいてもらって、結社人口を増やしなから短歌

を持続していつてほしいな、と願っています。何事も持続することが大切だから。「コクーン」で何とかがんばって。

小島 「コクーン」は、大松さんのリーダーシップがすばらしいから、活発に活動してますよ。

大松 いやあ、「コクーン」は閉鎖空間ですよね。

高野 「コクーン」に無所属の人もいれちゃうとか。

小島 それはダメって最初から言われましたもん。

高野 だから改革するわけ。初め無所属で「コクーン」に入つて、二年ぐらい経つたらコスモスに入ってもらうとか(笑)。

小島 最後に高野長老からすばらしいメッセージがありましたので、ここで終わりたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

